自閉スペクトラム症における自己理解の在り方と自尊感情との関連

リマ　マユミ

自分自身についての理解を深めるためには，他者との関係性が必要不可欠である。定型発達児においての自己理解の発達とは，物理的および社会的環境との主体的・能動的な相互作用の発達に他ならず，特に高次な自己理解とは，他者との密接な関係性の中で培われるものと考えられる。しかし，自閉スペクトラム症児においての自己理解は特異的であり，幼少期には自己を他者の中にある存在としてとらえなかったり，思春期・青年期においては，他者との相互作用ではなく，一方通行な関係において自己を理解したり，他者を全く考慮しなかった場合に自己を肯定的にとらえると言われている。実際に，自閉スペクトラム症児は児童期から自己を周囲の人と同じようにできないと感じ，また周囲からのネガティブな感情を向けられる。そのような経験が積み重なり，青年期にはそのような自己に違和感，不安，疑問を抱き始め，自尊感情の低下を招く恐れがある。

自尊感情とは，自己に対する全般的な自己評価である。自己評価はどのような自己を理解し，理解された自己をどのように価値づけるかによって決定される。

発達障害者は自己理解に大きな問題があるとされており，自己理解支援に関する研究が多数みられる。自己理解支援により，自己の特性をより知ることができり，想像以上に成し遂げられる体験は自己を肯定的に評価しうると考えらる。また，他者理解が困難であることと関連して，自閉スペクトラム症者の自己理解は特異的であると言われているが，社会性の発達や障害受容により，発達の過程において，自己理解の仕方が変化し得るのではないかと考えられる。したがって，本研究の目的は，自閉スペクトラム症者において，どのような自己理解や体験が自尊感情に影響を与えるのかを検討することである。

調査協力者は17名の自閉スペクトラム症者であった。自由記述式の質問紙および半構造化面接を実施した。その結果，14つのカテゴリーが生成され，そのうち11つのカテゴリーが肯定的な自己評価，3つのカテゴリーが否定的な自己評価の要因になるとされた。